

# 哲学研究

第四百九十三号

第四十二卷  
第十一册

形而上学的な存在は必要か？

ピーター・アントン

武田弘道 訳

形而上学的な存在とか過程が必然的に存在するという主張が非常にしばしばなされる。わたくしがここで念頭におくことはそういう種類の要求の意味の吟味とそれらの要求の妥当へ疑いを投げかけることである。

形而上学的な過程や存在というものの存在の要求に端緒を与える問題の多くのは、「事態 (state of affairs) X」という、われわれがその事実であることを観察するものがどうして事実であろうことが可能なのか？」という問いの形に铸込まれるものであり、いずれもその形へ铸込むことのできるものである。この铸型の典型として次のものをとることにしよう——

- (一) ある事物がたがいに類似することをわたくしが観察する。一つの事物がある他のものに類似しようことはどうして可能なのか？
- (二) わたくしは完全な存在者の観念をもっている。わたくしがそういう観念を持つとうはどうして可能なのか？
- (三) 真空の中での光速度の測定値は不変値である。このようにならうとはどうして可能なのか？

形而上学的な存在は必要か？

こうした事柄のどれもがある真正の問題を提起すると思われてきたし、それぞれに解決となえられるものが与えられていて、その解決というのがどれもこれも、経験論哲学者たちの使う「見つかる」(“detectable”)といういみでは見つかりはしない存在(典型の(一)と(二))とか過程(三)の場合(四)の要請をする点が共通している。

さて、そうした存在や過程を要請する哲学者たちはそれらの存在や過程が経験的には見つかるものでないことは抜け目なく感付いている。とはいえ、この事実がかれらの案件に不利であるとは考えない。というのも、要請された形而上学的な存在や過程は、科学者たちが一般に自分らの問題の解決のために要請する存在や過程にくらべて何一つ遜色がないというのがかれらが一般に思っていることなのである。後者の類いの存在の例は電子や遺伝子であり、後者の類いの過程の例は電子スピンである。確かに、これらの存在や過程が経験論者のいういみで見つかるものである、ということがまだ頭に入っていない形而上学者たちがいるがそれでも、事実がこうであると知っている多くの形而上学者は科学者が呼びこんだ存在や過程が形而上学者の目には自分の形而上学的な存在や過程のときと非常に似ているとうつる仕方で触れられない、「見つかる」のではあるが」という事実に未だに気を取られているのである。この見解は、額面どおりにとると、理屈はずれのものとも見えないし、わたくしもこれが即刻に非とされるべきものとは考えない。これは単に、存在するものはわれわれがそれを経験的に見つけることができるかどうかに応じて存在する、という主張なのである。

だが、この見解には、額面通りに見える以上の背後のものがある。そうとわかるために上記の典型を考えてみることにしよう。どの典型も、ある事態が事実であることが観察されるという観察をして、それから、それが事実ある通りであることがどうして可能なのかと尋ねている。上記の問いが「どうして可能か」の形に鑄込まれていることは意味がある。普通の非哲学的な文脈のなかで、問いが「どうして可能か」の形に鑄込まれているときはいつも、この言い回しの伝えるものに、問う者の側の所信、言明されている観察された事態が現実存在するという事実については

なにか難点があるという所信がある。そうした問いには、「そうとはだれが思っただろうか?」とか「これは驚いたものだ!」とか「こうなるはずはないのだが!」までの気配がする。また、これらの評言はすべて「……でなければ、事実であるこのことは事実でなかったであろう」という含みをもっていることは明らかである。手短かに言えば、「どうして可能か」の問いの普通の使い方は、それらの問いはいつでも「事実であることが観察された $p$ は、 $q$ も事実でなかったならば事実でなかったことであろう」の形の問いに翻訳可能である。ただし、 $p$ と $q$ は世界のあり方についての言明である。また、これは $q$ が $p$ にとっての必要条件であることを言う言い方にすぎない。だから、「 $p$ が可能であるのはどうしてか?」を尋ねるのは伏陰的に「 $p$ には必要条件 $q$ がある、その必要条件は何であるか?」と言うことである。

こうしてわれわれは、哲学者たちがそういう必要性の申立てをするときに使う「必要条件」という表現のいみの考察へ向けられる。

われわれの関心は「偶然的」を「反意語」とするいみの“necessary”、「必然的」よりは「十分な」と対照をなすいみの“necessary”、「必要な」にあることは明らかである。というのも、「 $p$ には必要条件 $q$ がある」と言うことは「非 $q$ ならば非 $p$ 」と言うことであり、これは「 $p$ ならば $q$ 」に帰着するから、 $p$ は $q$ の十分条件であり $q$ は $p$ の必要条件であるという公認の言明を言うことなのである。

さて、科学では任意のある事態へ「必要」(上記で限定しておいたいみで)という語を付与するかしないかには完全に明確な規準がある。「燃焼は、酸素がないと起らない」という言明を考えてみよう。この言明の言うところは、酸素の現在が燃焼の必要条件なことである。酸素の現在が燃焼が起るための必要条件である、という事実を疑う者を説得にかかるとはどのようなことをするか? 疑う者に酸素が燃焼の必要条件であることを納得させるときにこの説得というものは何であるのか? 上記の問いに答えを出すのにわれわれには少しの困難もない。その懷疑者へのわれわ

れの答えはこうでもあろう。

酸素が燃焼の必要条件であることをあなたは疑われるのですね？ よろしい、わたくしはそうであることをあなたに証明することにします。ここに点火した蠟燭があります。芯の先で燃焼が起こっていることには同意ですか？

はい、炎があります。

そこでわたくしは蠟燭の上へ釣鐘形のびんを下ろす。このびんは空気中の諸気体が自然状態であるのと同じ比率で諸気体を包むが、違っている点といえばその釣鐘形のびんには酸素が現在しないことである。ごらんの通り、蠟燭は直ちに消える、すなわち燃焼が止む。

これを目にすると、酸素が燃焼の必要条件であることにわたくしは異存ありません。というのは、酸素を除去くと燃焼がやむからです。

わたくしが訴える点は、この手続がそれともこれと本質的に類似のものが懷疑者に酸素が燃焼の必要条件であることを説得するのに使われてよい適切なものであること、またそればかりでなく、それ以下、のどんなこともかれを納得させるに十分でないことである。われわれが酸素の現在は燃焼の必要条件であると言っているときにわれわれが意味しているのはまさにこういう手続が示す結果なのである。懷疑者はあの言明が真であることを納得させるみちは酸素を取り除くことであり、その言明の真を納得させるときにそのひとに説得していることは、燃焼が起こってはいたのにそれが止んだことである。

では、一般的に言うところ、「必要条件」ということばが普通のはなしや科学で使われる截然としたみでは $q$ が $p$ の必要条件であると言うことは $q$ が事実とならなければ $p$ は起こらないと言うことであり、そして、 $q$ を除外すること、 $p$ が $q$ もはや起こらないことを観察することによって、 $q$ が $p$ の必要条件であることを証明するのである。

以上が、わたくしがまた他のひとびとが、 $q$ が $p$ の必要条件であると言うときに、わたくしが意味すること、また他のひとびとが意味するところ、わたくしが思っていることである。だが、形而上学者が形而上学的存在や形而上学的過程の必要を言明するときに形而上学者が意味していることではない。このことを見せるために、もう一度さきの範例を考えて見よう。もしわれわれが(一)を上記のような仕方で翻訳すると(二)ができる。

事物が相互に似ているための必要条件は何であるのか？

實在論者(すなわち、非名目論者)が(一)の面倒をみるためにもち出す必要条件は「普遍」と呼ばれるあの種の存在が存在することなのはもちろんである。もしも普遍がなかったとしたら似るといふことはないのである——そういうことはありえない、とわれわれに確言してくれる。だが必要条件といふことばをさきの分析がわれわれの了解として提示するものの意味としてとるならば、そういう存在が存在することが必要条件ではないことは確かである。というのも、あるひとが普遍は類似にとつての必要条件であることを疑うとしたら、實在論者はかれにどうすれば普遍が類似のための必要条件であることを説得することができるのか？ 説得するには實在論者が少なくとも一個の普遍をとり除いて、それからその普遍についての類似がもはや存在しないことをわれわれに観察させてくれることが必要であろう。だが、この手続をとることはどのようにしてもかれのできることはない。普遍はとり除きを許すような類いの存在でないからである。

それでは、普遍が類似にとつての必要条件であるという實在論者の主張はどうなるのか？ わたくしは少しも考えのうかばないものの一人である。「必要条件」という表現が、普通の用法や科学で使われているようにか、また実際、

形而上学的な存在は必要か？

实在論者たちが他のものごとにかかり合っているときのかれら自身の言語で使われているように使われているのではないという事実を考え合わせると、この表現の意味の何であるかをわたくしは知らない。その实在論者は普通の言語のもつ規約に、それらの規約が伏陰的な割には少なからず截然としてゐる規約に、違反してゐるのである。(一)で使われているような「必要条件」の意味を打ち立てる苦勞は、間違ひのないところ、またやや大儀なこととわたくしなら思うところであるが、实在論者の背負ひこむものなのである。

範例(二)は似たような取扱いをうける。翻訳では次の(二)になる。

あるひとが完全な存在者の観念をもつための必要条件は何であるか？

ここでは、説明の途中でもう一つ別の存在、つまりは神、が入ってこよう。だがまたもや、神の存在することが完全な存在者の観念をもつために実際に必要条件であることを見せるためには、神の存在しない条件で観察をすることによって、そういう観念を以前にもつたことのないひととはだれにでも、神の不在の今、そういう観念は湧いてこないことを見せるというようなことが必要であろう。

普通や神を必要条件としてもち出すひとたちにわれわれが適正に許容することのできるせいぜいのことは、これらの条件がかれらが説明しようと思つてゐる諸現象にとつて実際のところ満足条件であることである。このことはいささかの躊躇もなしに許容されることができるといふのも、そうすることはわたくしが仮りにこの論文を書く満足条件がハックスレの有名なサルたちが盲目打ちのタイプライターでたたき出す！ 条件であることを認めさせられたとして、またわたくしは躊躇せず認めるのであるが、そのときわたくしが認めるはずのこと以上を認めることではないのである。

今度は第三の範例を見よう。範例(三)は一寸考えたところではわたくしのテーゼのつもりとしては選び損ないと思えるかもしれない。なんとといっても、計測された光の速度の考察は形而上学もんだいというよりは物理学のこと

がらではないのか？ 真空の中で測定した光の速度が不変値であるという言明が物理学上の言明であり形而上学の言明でないこと、これにはわれわれは疑いをもつ必要はない。だが、こういうことになるのがどうして可能なのかという問いは形而上学の言明である——今世紀の初期の傑出した物理学者たちはその問いに答えようと試みたという事実があるにもかかわらず。(物理学者たちが自分たちが物理学をしているという感想で形而上学をしているときはかれらは悪しき物理学をしている!) このことをもっとよく考えて見るために範例(三)を慣例の仕方で翻訳しよう。結果は次の(三)になる。

光速度を真空中で計測した値が不変値になるための必要条件は何であるか？

ここでまたしても、これが事実であってはならないという含意に疑いの余地はない。問題が生じるのは物理学者たちのもっている所信、光はエーテルの振動であり、ずり動き係数がゼロ又は非常にそれに近いものであるという所信、の結果である。この意味は、あらゆる状況でエーテルは、光速度を計測するためのどのような座標軸をとったにせよ、それに関しては定常であると安心していられるものであるという意味である。だから、光線の伝播の方向へ動く座標軸は、光線の伝播の方向と反対の方向へ動く座標軸から測ったものよりも、その方向では遅い伝播速度を測るのでなければならぬ。これが事実でないことが見付かった、すなわち測定された速度はどれも同じであることがわかった。物理学者の最善の知見に照して測定されていなければならぬもののこのような測り損いが問題を提起し、説明を要求した。そして、一つの説明がフィッツジェラルドによってさし出された。光速度の計測値が不変値であるための必要条件となるものが何かとの問いへのかれの答えは、すべての物体は運動の方向に  $\frac{1}{\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}}$  の逆数倍の縮小をすることであった。だが、この要請された縮小はつきとめることのできないものであり、そして、光のとる思いがけない行動を「説明する」以外に役に立つものでなかった。

アインシュタインがかれの特殊相対性理論を打ち出したのはこの点についてであった。ここでのアインシュタイン形而上学的な存在は必要か？

の哲学上の貢献は、実際のところ、なんの説明も必要でないということを否定すること、すなわち、光速度の不変性の必要条件がある、ということを否定することであった。約言すると、かれはその問題が形而上学問題であることを認め、問題そのものは物理学者たちには何も問題でないことを見てとったのであった。

さて、上記のそれぞれの範例に共通なものは何であるか？ いずれもが、事実であると観察されたことが「奇妙な」状況であることを注記している。いずれの場合にも、見かけの上での奇妙なことは「説明」によって「解説」される必要のあること、そして説明はこれまでかくれていた必要條件、その必要條件が存在することで、観察された奇妙な事態を「許容」する（またはその「原因となる」）もの、の発見（多分は演繹）にあるとする伏陰的な想定がある。

そこで、特徴的なこととして、形而上学的存在や過程を取引きするひとたちは観察された事態を目に見えて逆説的なものと見るのであるが、本当にはこれらの事態は逆説的ではないことをかれらは知っているので、観察された事態が事実として逆説的でないなら事実でなければならぬ、必然的で観察可能でない事態をさがすのである。

ある条件が必要条件であると言うときその意味することについてのわれわれの分析に照らしてみると、形而上学者の必然性要求は真とされることはできない。だが、必然的であることを要求されている、つきとめることのできない事態が必然的であることが証明されず、事実であるとも証明されることができないならば、われわれはそれらの事態の存在することを納得することができない。

形而上学者によって事実であると断定される観察不可能な事態が事実でもあるという論理的可能性はまだ残されている、だがそれらが事実となる単なる可能性では形而上学者に（また他のだれにも）、なにごとを説明するにつけても役に立つものではない。

(了)